

〔資料〕

## 基礎看護学実習に導入した学生2人で患者1人を受け持つ実習方法の評価(続報)

— 2年次のペア実習の経験が3年次領域別実習に与えた影響 —

### Evaluation of a clinical training method in which two nursing students take charge of one patient in Fundamental Nursing Practice: Progress report

— Impact of the 2nd-year pair practicum experience on 3rd-year field-specific training —

灘波 浩子<sup>1)</sup> 鈴木 聡美<sup>1)</sup> 菅原 啓太<sup>1)</sup>  
川島 珠実<sup>1)</sup> 岡根 利津<sup>1)</sup> 白石 葉子<sup>2)</sup>

#### 【要旨】

2年次の基礎看護学実習Ⅱに導入したペア実習方法が3年次の領域別実習に与えた影響を明らかにするために、質問紙調査を行った。対象は、基礎看護学実習Ⅱでペア実習を経験し翌年に領域別実習を履修した学生とその際の臨地実習指導者・担当教員とした。結果、良い影響として、学生からは【他者との協働／他者からの学び】が、指導者・教員からは【協調性の向上／円滑なペア受け持ち】が抽出された。良くない影響として、学生からは単独での患者受け持ちに伴う【不安感／ケアへの戸惑い／責任感】が、指導者・教員からは【単独での看護過程展開への懸念／領域で求める能力との差異／単独で受け持つ意識の低さ】が抽出された。対象者の7割以上からペア実習は「良い～どちらでもない」、4割以上からペア実習の影響は「特になし」との回答があり、基礎看護学実習Ⅱにペア実習を導入したことによる領域別実習への影響は大きくなかったと推測された。

【キーワード】 臨地実習 ペア実習 実習方法 授業評価

#### I. はじめに

日本看護系大学協議会の報告書でも述べられている<sup>1)</sup>ように、近年、入院患者の重症化や入院日数の短縮に伴い、看護基礎教育での臨地実習に適した患者選定が困難になっている。三重県立看護大学(以下、本学)の基礎看護学実習Ⅱにおいても、従来の学生1人で患者1人を受け持つ実習方法(以下、一人型実習)では、実習期間(2週間)継続して入院している患者を受け持つことが困難になっていた。初めて受け持ち患者に看護援助を提供する2年生にとって、実習期間中に受け持ち患者が変わることや、自身の能力以上のケアが必要な患者を受け持つ状況は負担が大きかった。また、受け持ち患者が変更になった場合、臨地実習指導者(以

下、指導者)や実習担当教員(以下、教員)は、学生に1人目の患者の看護過程を展開させながら、新たな患者の理解を助ける支援を行うため指導が複雑化し、指導者・教員にとっても負担になっていた。そこで我々は、学生が2週間継続して患者を受け持つことができ、学生の心身に過剰な負荷がかかるとなく、必要な学習が効果的にできるように、平成28年度より一人型実習から、学生2人で患者1人を受け持つ実習方法(以下、ペア実習)に変更した。当該実習実施後のアンケート調査では、学生および指導者・教員から概ね良好な評価を得たものの、学生からは3年次の領域別看護学実習(以下、領域別実習)で患者を1人で受け持つことへの不安が上がり、指導者・教員からはペア実習の

受付日: 2023年3月10日 受理日: 2023年7月12日

1) Hiroko NAMBA, Satomi SUZUKI, Keita SUGAWARA, Tamami KAWASHIMA, Ritsu OKANE: 三重県立看護大学

2) Youko SHIRAIISHI: 常葉大学健康科学部看護学科

経験が領域別実習に影響を及ぼす可能性を危惧する回答も少なくなかった<sup>2)</sup>。看護基礎教育におけるペア実習に関する先行研究のほとんどが、学生を対象とした調査研究であり、ペア実習の学習効果<sup>3)</sup>、ペア実習体制に対する印象<sup>4)</sup>、ペア実習の人間関係や満足度<sup>5)</sup>、ペア実習中の思い<sup>6)</sup>を整理したものであった。しかし、学生以外を対象にした研究は、実習指導者を対象にした小児看護学時実習指導の指導マニュアルに関する調査<sup>7)</sup>のみで、学生・指導者・教員3者を対象に同一の実習について調査した研究は、我々の報告<sup>2)</sup>以外にはなかった。加えて、ペア実習の経験による、その後に履修する実習への影響の有無や内容について調査された研究は見当たらなかった。

そこで、基礎看護学実習Ⅱに導入したペア実習の評価として、2年次にペア実習で実施した基礎看護学実習Ⅱが、3年次の領域別実習に与えた影響を調査し、基礎看護学実習Ⅱの評価を総合的に検討したため、ここに報告する。

## II. 方法

### 1. 研究対象者

- 1) 平成28年度基礎看護学実習Ⅱでペア実習を経験した学生のうち、平成29年度領域別実習を履修した学生（平成30年度4年生）88名
- 2) 平成29年度領域別実習（成人・老年・母性・小児）で学生指導を担当した指導者42人と教員17人

### 2. データ収集方法

#### 1) 調査方法と期間

研究デザインは調査研究とし、無記名自記式質問紙を用いて学生と教員は留め置き調査、指導者は郵送調査を実施した。調査期間は、対象学生が卒業要件のすべての実習を終了した平成30年7月30日～同年10月5日とした。

学生への調査依頼は、研究協力依頼書と調査用紙を配布し口頭で説明するとともに、大学から付与されている学生メールアドレス宛に調査用紙を添付したメールを送信した。回答後の調査用紙は、事務局に設置されているレポート提出ボックスに投函してもらった。

指導者への調査依頼は、各施設の看護部を通して研究協力依頼書と調査用紙を一斉配布し、回答後の調査用紙は、返信用封筒に封入して郵便ポストに投函してもらった。

教員の調査依頼は、対象となる教員が参集する会議後に研究協力依頼書を配布し口頭で説明した後、調査用紙と封筒を対象教員のメールアドレス宛に配布した。また、対象教員のメールアドレス宛に調査用紙を添付したメールを送信した。回答後の調査用紙は、提出用メールアドレスに投函してもらった。

## 2) 調査内容

### (1) 学生

- ① 基礎看護学実習Ⅱの「学生2名で患者1名を受け持つ」実習方法は、総合的に良い方法だったかについて、「とても良い」～「とても良くない」の5段階評価で尋ねた。
- ② 基礎看護学実習Ⅱをペア実習で実施したことで、領域別実習中に役立った・良かったと感じた点とその理由を自由記述で尋ねた。
- ③ 基礎看護学実習Ⅱをペア実習で実施したことで、領域別実習中に困った・辛かったと感じた点とその理由を自由記述で尋ねた。
- ④ 基礎看護学実習Ⅱをペア実習で実施したことに対する意見・要望を自由記述で尋ねた。

### (2) 指導者・教員

- ① 担当する領域別実習で、複数の学生が患者1人を受け持った場合の指導経験の有無を尋ねた。
- ② 基礎看護学実習Ⅱの「学生2名で患者1名を受け持つ」実習方法は、総合的に良い方法だったかについて、「とても良い」～「とても良くない」の5段階評価で尋ねた。
- ③ 基礎看護学実習Ⅱをペア実習で実施したことで、領域別実習上良い影響があったと感じた点とその理由を自由記述で尋ねた。
- ④ 基礎看護学実習Ⅱをペア実習で実施したことで、領域別実習上良くない影響があったと感じた点とその理由を自由記述で尋ねた。
- ⑤ 基礎看護学実習Ⅱをペア実習で実施したことに対する意見・要望を自由記述で尋ねた。

## 3. 分析方法

5段階評価で得た量的データは記述統計量を算出し、自由記述で得た質的データは質的記述的に分析した。質的記述的分析においては、学生・指導者・教員別に、

自由記述内容の意味や内容を保ったまま簡潔な表現にしたものをコードとし、その意味内容の共通性を解釈し、類似したものをまとめてサブカテゴリーとした。さらに、サブカテゴリーを比較しながら類似したものを統合し、その意味を適切に表現した名前を付けてカテゴリーとした。分析過程では、研究メンバー間でチェックを行った。

#### 4. 倫理的配慮

対象者への研究協力依頼書には、研究の主旨・方法、協力は任意であり、拒否によって不利益を被ることがないこと、調査用紙は無記名で匿名性を確保すること、調査用紙の提出により同意を得られたものとみなすことを記載した。

学生への研究協力依頼は、休憩時間に研究協力依頼書を一斉配付し、研究協力の有無にかかわらず学生個々の成績評価には一切関与しないこと、今後の授業を受ける権利への影響は一切ないことを説明した。調査用紙の提出先は、事務局内レポート提出ボックスとし、任意性を確保した。

指導者が所属する各施設の看護部長には、文書により研究協力の同意を得た。指導者の研究協力の有無が看護管理者に知られぬよう、調査用紙は郵送で提出してもらった。

教員の研究協力の任意性・匿名性を担保するために、回答後の調査用紙は封筒に入れて、教職員のみが利用する準備室の提出用メールボックスに提出してもらった。提出用メールボックスは、盗難予防のため研究代表者のみが持つ鍵で施錠し管理した。

学生と教員の調査用紙については、筆跡から個人を特定される懸念を考慮し、研究協力依頼後に電子ファイルを配信し、対象者が直接入力してプリントアウトしたものを提出することも可能とした。

データ集計は「守秘義務に関する誓約書」を交わし

たアンケート入力代行業者に依頼することで、筆跡による回答者の推定を防いだ。

なお、本研究は、三重県立看護大学研究倫理審査会の承認を得て実施した（通知書番号176302）。

### Ⅲ. 結果

調査用紙の提出は、学生26人（回収率29.5%）、指導者10人（回収率23.8%）、教員7人（回収率41.2%）から得られた。

担当する領域別実習で複数の学生が患者1人を受け持った場合の指導経験の有無について、指導者の回答は、「よくある」3人（30.0%）、「まれにある」3人（30.0%）、「ない」4人（40.0%）であった。教員の回答は、「よくある」1人（14.3%）、「時々ある」3人（42.9%）、「ない」3人（42.9%）であった。

#### 1. 基礎看護学実習Ⅱをペア実習で行うことに対する総合評価（図1）

基礎看護学実習Ⅱで「学生2名で患者1名を受け持つ」実習方法に対する総合評価として、学生の回答は、「良い」16人（61.5%）が最も多く、次いで「とても良い」4人（15.4%）、「どちらでもない」3人（11.5%）、「良くない」2人（7.7%）、「とても良くない」1人（3.8%）であった。なお、「良くない」「とても良くない」の回答者の自由記述に、領域別実習の影響に関する記述はなかった。

指導者の回答は、「どちらでもない」7人（70.0%）が最も多く、次いで「良い」2人（20.0%）、「とても良い」1人（10.0%）で、「良くない」と「とても良くない」の回答はなかった。

教員の回答は、「良い」5人（71.4%）が最も多く、「どちらでもない」1人（14.3%）、「良くない」1人（14.3%）で、「とても良い」と「とても良くない」の回答はなかった。

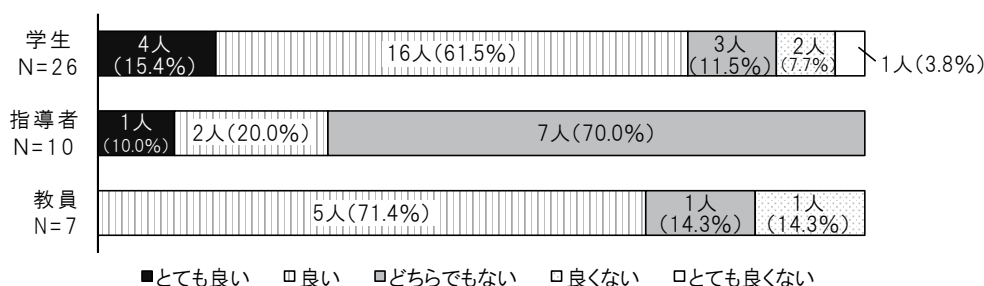


図1. 基礎看護学実習Ⅱでペア実習を実施したことの総合評価

表1. ペア実習経験が領域別実習で役立った・良かったこと（学生）

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
他者との協働	グループメンバーとの相談・調整に対する慣れ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・基礎でペアで話し合うことに慣れたため、領域でも受け持ち以外の患者についてグループで相談することが当たり前になった</li> <li>・グループの誰かに相談してみようという気持ちや、グループメンバーを手伝ってあげようという気持ちがあり、実際に相談しながらできた</li> </ul>
	ペア時の円滑な協力	<ul style="list-style-type: none"> <li>・基礎実習で身についた協調性によって、1人で患者さんを受け持つことになってもメンバー同士の調整を抵抗なくできた</li> <li>・互いが意見を言いやすい関係づくりや、コミュニケーション能力が身につく機会になった</li> </ul>
他者からの学び	ペア実習での学びの活用	<ul style="list-style-type: none"> <li>・基礎のペア学生が気をつけていたことを、領域で思い出し、患者の安全につながった</li> </ul>
	指摘による改善	<ul style="list-style-type: none"> <li>・2名で行ったことで客観視できフィードバックをもらうことで、領域でも指摘されたことを直したり、互いの悪いところや良いところを強みに変えられた</li> </ul>

表2. ペア実習経験が領域別実習で困った・辛かったこと（学生）

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
単独で患者を受け持つ不安感	単独で患者を受け持つ不安	<ul style="list-style-type: none"> <li>・1クール目は、1人で1人の患者さんを受け持つことに対して、不安になった</li> </ul>
	単独で患者を受け持つ緊張	<ul style="list-style-type: none"> <li>・突然1人で受け持つことになり、メンバーに相談してもペアに相談していた時より不安感が残った</li> </ul>
単独で患者にケアを提供する戸惑い	単独でのケア実施の負担	<ul style="list-style-type: none"> <li>・2人でやっていたケアが、1人だと方法が変わってくるため、初めは戸惑った</li> <li>・2人で役割分担していたが、領域では全て行わなければならないと、負担が多かった</li> </ul>
	知識・技術への不安	<ul style="list-style-type: none"> <li>・1クール目は、領域で求められる知識・技術に対する不安があった</li> </ul>
患者への責任感	単独で患者を受け持つ責任	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分がその患者を1番知っていて、強く責任を感じた</li> <li>・責任が重くなったと感じた</li> </ul>

## 2. 基礎看護学実習Ⅱをペア実習に変更したことによる領域別実習への影響

### 1) 学生の認識

自由記述のうち、平成28年度の基礎看護学実習Ⅱ（ペア実習）での経験に関する記述のみであった回答を除いて分析した。以下、コードを「斜体」、サブカテゴリーを< >、カテゴリーを【 】で表す。

基礎看護学実習Ⅱをペア実習にしたことで、領域別実習で役立った・良かったと感じたことは、8人の記述があり、8コード、4サブカテゴリー、2カテゴリーが抽出された（表1）。一方で、役立った・良かったことは「特になし」との記述も3人（11.5%）から得られた。

学生は「グループの誰かに相談してみようという気持ちや、グループメンバーを手伝ってあげようという気持ちがあり、実際に相談しながらできた」など基礎看護学実習Ⅱでの経験から他者に意見や相談することに慣れており、メンバー同士の調整も抵抗なくできたなど<グループメンバーとの相談・調整に対する慣れ>があり、領域別実習で患者をペアで受け持った際にも基礎看護学実習Ⅱでの学びを活かして<ペア時の円滑な協力>ができたなど【他者との協働】ができたと感じていた。また、「基礎のペア学生が気をつけていたことを、領域で思い出し、患者の安全につながった」という実体験から<ペア実習での学びの活用>とペアで実習を行うことで自身の行為を客観視し、フィードバックを得た経験から<指摘による改善>ができるなど【他者からの学び】を得ていた。

領域別実習で困った・辛かったことは、6人の記述があり、8コード、5サブカテゴリー、3カテゴリーが抽出された（表2）。一方で、「2名で受け持った後

表3. ペア実習に対する意見・要望（学生）

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
ペア実習の メリット	精神的負担の軽減	<ul style="list-style-type: none"> <li>・1人の患者さんに対して相談しながら行えて良かった</li> <li>・話し合いながら進められるので、精神的負担も減るので良い</li> <li>・2人で受け持つことで、不安が軽減された</li> <li>・初めて看護経過を展開する実習だったので、2人だと安心感があった・2名の方が緊張感や責任感が軽くなり、不安は軽減される</li> </ul>
	分担による効率性	<ul style="list-style-type: none"> <li>・2人で受け持つことで忙しさが減る</li> <li>・記録やアセスメントに慣れていない為、2人で分担することで自分の展開するものに集中できる</li> </ul>
	チーム意識の向上	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ペア実習は、チームやペアを意識する上では良い</li> <li>・周囲が準備を手伝ったり、みんなで実習を行うということを考えていれば何も辛くないと思う</li> </ul>
	ペアからの学び	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の苦手なことが得意なペア学生から、学ぶことが増えてよかった</li> </ul>
ペア実習の デメリット	ペアとの関係や能力差による不都合	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ペアの学生とうまくいかない、1名でやるよりストレスが多いを見た</li> <li>・1人は積極的だがもう一方が消極的だと、ペアのどちらか一方に負担がかかってしまう</li> <li>・知識・技術に差がありすぎると、比較されたり足を引っ張ったり、やりにくい</li> </ul>
	調整のしにくさ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・互いが考えてやりたい事が多いため時間が限られてしまう</li> <li>・助け合えるがやりにくい</li> </ul>
	領域別実習への不安	<ul style="list-style-type: none"> <li>・領域別実習では1人受け持ちが不安要素になって、ケアに自信が持てなかった</li> </ul>
ペア決定時に 検討して ほしいこと	成績や技術力を揃える	<ul style="list-style-type: none"> <li>・成績順で割り振り、知識・技術が同じくらいのペアだったのはやりやすくてよかった</li> <li>・成績でのペア決定は、正直実習しやすい</li> <li>・学生の得手不得手を意識したペアを作るのが良い</li> </ul>
	特性の考慮	<ul style="list-style-type: none"> <li>・互いの性格上のもつれや意見をいいにくい相手だと実習自体の苦手意識につながる</li> <li>・学生のコミュニケーションの様子から判断してほしい</li> <li>・アセスメントをやる人やらない人などでペアを考えてほしかった</li> </ul>
	1人受け持ち希望	<ul style="list-style-type: none"> <li>・最初の実習から1人で1人の患者を受け持ちたかった</li> </ul>
指導教員 への要望	話し合う時間の確保	<ul style="list-style-type: none"> <li>・実習時間内にペアだけで話し合う時間の確保ができれば良い</li> <li>・実習中に互いのフィードバックの時間が必要</li> </ul>
	教員の支援希望	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ペア間の関係性など、学生同士だけでは解決が難しい問題もあるので、先生の目をしっかりと向けてほしい</li> </ul>
初期の実習に 期待すること	やりがい・楽しさの実感	<ul style="list-style-type: none"> <li>・厳しくて忙しくて精神的に疲れ果てるより、やりがいとか楽しさを感じられることが重要</li> </ul>
	一連の看護に対する慣れ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・2年生のうちは完璧な看カテを行うことよりも、一連の看護に慣れることが大事</li> </ul>

に1名で受け持ったことで困ることはなかった」など困った・辛かったことは「特にない」との記述も6人(23.1%)から得られた。

学生は、領域別実習になって「突然1人で受け持つことになり、メンバーに相談してもペアに相談していた時より不安感が残った」など【単独で患者を受け持つ不安感】を感じており、「2人で役割分担していたが、領域では全て行わなければならない負担が多かった」という<単独でのケア実施の負担>や領域別実習で求められる<知識・技術への不安>から【単独で患者にケアを提供する戸惑い】を抱いていた。また、「自分が

その患者を1番知っていて、強く責任を感じた」といった<単独で患者を受け持つ責任>から【患者への責任感】が抽出された。

ペア実習への意見・要望には、12人の記述があり、28コード、18サブカテゴリー、5カテゴリー【ペア実習のメリット】【ペア実習のデメリット】【ペア決定時に検討してほしいこと】【指導教員への要望】【初期の実習に必要なこと】が抽出された(表3)。【ペア実習のメリット】としては、初めて患者を受け持つ実習のため学生は不安や緊張が強くなりがちだが、「2人で受け持つことで、不安が軽減された」など<精神的

負担の軽減>に関する記述が最も多く認められた。次いで「2名で受け持つことで忙しさが減る」など<分担による効率性>やペアやチームを意識することに関する記述から<チーム意識の向上>が抽出されたほか、「自分の苦手なことが得意なペア学生から学ぶことが増えてよかった」といった<ペアからの学び>もあった。【ペア実習のデメリット】としては、「知識・技術に差がありすぎると、比較されたり足を引っ張ったり、やりにくい」といった<ペアとの関係や能力差による不都合>や「互いが考えてやりたい事が多いため時間が限られてしまう」といった<調整のしにくさ>のほか、「領域別実習では1人受け持ちが不安要素になって、ケアに自信が持てなかった」という<領域別実習への不安>が抽出された。

また、学生は【ペア決定時に検討してほしいこと】として、「成績でのペア決定は、正直実習しやすい」といった<成績や技術力を揃える>ことや「互いの性格上のもつれや意見をいにくい相手だと実習自体の苦手意識につながる」ため学生個々の<特性の考慮>を望み、なかには<一人受け持ち希望>の学生もいた。【指導教員への要望】として、ペアでの調整のための<話し合う時間の確保>や調整困難時の<教員の支援希望>を望んでいた。そのほか、【初期の実習に必要なこと】としては、看護過程の展開に力を入れるよりも<やりがい・楽しさの実感>や<一連の看護に対する慣れ>を重視したいという学生の思いが抽出された。

## 2) 指導者の認識

基礎看護学実習Ⅱをペア実習にしたことで、領域別実習上良い影響があったと感じた点は、4人の記述から、5コード、2サブカテゴリー、1カテゴリー【協調性の向上】が抽出された(表4)。一方で、「よくわからない」を含め、「前年度との変化は感じない」な

ど良い影響は「特にない」との記述が6人(60.0%)から得られた。

指導者は、例年よりも「学生間の協力動作(シーツ交換など)やコミュニケーションが円滑であった」など<学生同士の協力>ができていたことや自分の受け持ち患者以外の<他学生の患者への関心>の高まりなど【協調性の向上】を感じていた。

良くない影響があったと感じた点については、9人の記述があったが、8人(80.0%)は「特別良くない影響は感じなかった」や「学生の患者情報収集能力はそれほど変わらない」などであり、良くない影響として記述があったのは1人であり、その記述から【単独での看護過程展開時に生じる困難さへの懸念】が抽出された(表5)。

ペア実習への意見・要望は、8人の記述から、18コード、14サブカテゴリー、4カテゴリー【ペア実習の容認】【領域別実習への影響に対する懸念】【良否の判断できない】【効果的な実習に向けた意見】が抽出された(表6)。指導者は、パートナーシップ・ナーシング・システム(PNS)導入施設が増えているという<看護現場の現状との合致>や、学生の受け持ちに見合った患者が減少しているため<受け持ち患者の選定しやすさ>といった現在の医療現場の現状や、<意見交換による学習効果>および<領域別実習への影響なし>と感じていることから【ペア実習の容認】をしていると推測された。【領域別実習への影響に対する懸念】として、「患者の前で学生同士いろいろとなあなあにならないか気になる」など<責任感の欠如や慣れあい>や<意見交換のしにくさ><ペア同士の比較><技術経験の減少>が挙げられた。ほかに「ペア実習の方法を知らないので比較できない」など【良否判断できない】や事前シミュレーションの必要性など【効果的な実習に向けた意見】があった。

表4. ペア実習が領域別実習に与えた良い影響(指導者)

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
協調性の向上	学生同士の協力	・学生間の協力動作(シーツ交換など)やコミュニケーションが円滑であった
		・ケアなど、2人でペアをつくり行うことができていた
他学生の患者への関心	他学生の患者への関心	・学生同士で患者さんのことで相談をしていた
		・2人で協力して、意見を出し合うことで患者に看護を提供できていた
		・他学生の受け持ち患者への興味をもって話しかけたり、カンファレンスで意見が出るようになった

表5. ペア実習が領域別実習に与えた良くない影響（指導者）

カテゴリー	コード
単独での看護過程展開への懸念	・個人によるが、単独での看護過程展開に困難さを感じる

表6. ペア実習に対する意見・要望（指導者）

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
ペア実習の容認	臨床の現状との合致	・PNS導入病院が増えており、学生時からペアを導入することは良い ・看護の現場でもベアナーシングを導入しているので、協力やコミュニケーション能力の向上がねらえる ・患者が減っている中、対象患者を容易にさがせることは良い
	意見交換による学習効果	・互いの気づきや意見を共有し、学習できることはよい
	領域別実習への影響なし	・領域別実習に影響するようには感じない
領域別実習への懸念	責任感の欠如や慣れあい	・患者に対する責任感が薄れる可能性がある ・どちらかの学生が依存的にならないか ・1人で深く考えることが少なくなる可能性 ・患者の前で学生同士いろいろとなあなあにならないか気になる
	意見交換のしにくさ	・ペアの学生同士で意見を述べにくくないか
	ペア同士の比較	・ペアの学生同士で互いを比較しないか心配
	技術経験の減少	・技術経験が少なくなる
良否判断できない	ペア実習方法の不知	・ペア実習の方法を知らないので比較できない ・ペア実習の内容がわからないので教えてほしい
	わからない	・それぞれのメリットがあり、一概にはわからない
効果的な実習に向けた意見	1対1の実習がよい	・可能な限り、1対1の実習が望ましい（領域別では1対1が多い、就職後は1度に複数名受け持たなければならない）
	実習前学習の必要性	・実習前にペア学習のシミュレーションをしてはどうか
	学習支援の継続	・どのような実習方法にも対応して学生の学習意欲や学習量を維持し、学習支援したい

### 3) 教員の認識

基礎看護学実習Ⅱをペア実習にしたことで、領域別実習上良い影響があったと感じた点は、4人の記述から、9コード、4サブカテゴリー、2カテゴリー【協調性の向上】【円滑なペア受け持ち】が抽出された（表7）。一方で、3人（42.9%）からは良くない影響は「特にない」との記述が得られた。

教員は、「学生同士で協力し、ベッドメイキングや清拭等のケアをスムーズに進めることができていた」といった＜学生同士の協力＞や＜学生同士の相談＞によって「学生同士で相談してから教員や指導者へ相談するため内容が具体的である」こと、＜チーム意識の向上＞など【協調性の向上】を良い影響として捉えて

いた。また、領域別実習でもペアで受け持った際に「二人で協力し、より良い看護を考える姿勢がみられた」など【円滑なペア受け持ち】につながったと感じていた。

良くない影響があったと感じた点は、4人の記述から、8コード、4サブカテゴリー、2カテゴリー【領域で求める能力との差異】【単独での患者受け持ちへの影響】が抽出された（表8）。【領域で求める能力との差異】では、「個々の学生の学習努力が低いように感じた」といった＜努力・技術レベルの低さ＞やこれまでになく＜強い緊張＞などがあったことが挙げられた。また、【単独での患者受け持ちへの影響】では、「1人でできるようなことも何のためらいもなく他の学生や教員に頼む」など＜他者へ依存する傾向＞がみられ

表7. ペア実習が領域別実習に与えた良い影響（教員）

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
協調性の向上	学生同士の協力	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学生同士で協力し、ベッドメイキングや清拭等のケアをスムーズに進めることができていた</li> <li>・学生間で協力する姿勢がみられた</li> <li>・ケアの役割分担を主体的に行っていた</li> </ul>
	学生同士の相談	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学生同士が受け持ち患者の言動の意味や看護の方向性を良く相談をしていた</li> <li>・学生同士で相談してから教員や指導者へ相談するため内容が具体的である</li> </ul>
	チーム意識の向上	<ul style="list-style-type: none"> <li>・チームワークを意識して行動できるようになっている</li> <li>・2人ととどまらずグループ内での協力につながっていた</li> </ul>
領域での円滑なペア受け持ち	領域での円滑なペア受け持ち	<ul style="list-style-type: none"> <li>・領域別実習でのペア実習がスムーズだった</li> <li>・2人で協力し、より良い看護を考える姿勢がみられた</li> </ul>

表8. ペア実習が領域別実習に与えた良くない影響（教員）

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
領域で求める能力との差異	努力・技術レベルの低さ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・個々の学生の学習努力が低いように感じた</li> <li>・1人では患者とうまくコミュニケーションが取れない学生がいた</li> <li>・バイタルサイン測定手技のレベルが低かったのは、ペア受け持ちで測定の機会が半分になったからではないか</li> </ul>
	強い緊張	<ul style="list-style-type: none"> <li>・訪室する際の学生の緊張度はこれまでになく高かったように思う</li> </ul>
単独で受け持つ意識の低さ	他者へ依存する傾向	<ul style="list-style-type: none"> <li>・1人でできるようなことも何のためらいもなく他の学生や教員に頼む</li> <li>・お互いに甘えや役割分担、時にはペアの学生を頼ってしまうことがあるかもしれない</li> </ul>
	役割分担前提の取り組み	<ul style="list-style-type: none"> <li>・2人でひとつの援助をするという認識が強い</li> <li>・ペアで受け持ちになった場合、看護計画立案を分担しようとした</li> </ul>

表9. ペア実習に対する意見・要望（教員）

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
ペア実習の容認	現状では必要	<ul style="list-style-type: none"> <li>・対象患者が少なく仕方がない</li> <li>・PNSの病院が増えているため必要なのではないか</li> </ul>
	基礎段階では有益	<ul style="list-style-type: none"> <li>・実習に慣れていない学生にとっては、1人で受け持つよりも負担が少ないため良い</li> <li>・基礎看護学実習では、学生にとって有益だと思う</li> </ul>
	領域への影響なし	<ul style="list-style-type: none"> <li>・領域別実習の指導に特に支障はなかった</li> </ul>
領域別実習への懸念	判断力・技術力への影響	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学生の判断能力や技術力に影響をきたす恐れがある</li> </ul>
	ペア学生への依存や比較による影響	<ul style="list-style-type: none"> <li>・個々の学生が患者への責任を自覚する必要がある</li> <li>・ペア学生との学習姿勢や能力に大きな差があると、どちらかに頼ってしまう、引っぱられることがあるように感じる</li> <li>・ペア学生に頼ってしまったり、ペアと比較して自己評価することがある</li> </ul>
領域ペアへの期待	領域でのペア受け持ちへの期待	<ul style="list-style-type: none"> <li>・基礎のペア実習経験が領域別実習のペア受け持ちへの対応へつながる</li> </ul>



たことや「2人で一つの援助をするという認識が強い」といった〈役割分担前提の取り組み〉を良くない影響として感じていた。

ペア実習への意見・要望は、5人の記述から、10コード、6サブカテゴリー、3カテゴリーが抽出された(表9)。教員は、対象患者が少ないことやPNS導入病院の増加などからペア実習は〈現状では必要〉であり、〈領域への影響なし〉であるため、「実習に慣れていない学生にとっては、1人で受け持つよりも負担が少ないため良い」と〈基礎段階では有益〉と捉えて、【ペア実習の容認】をしていると推測された。しかし、2人で1人の患者を受け持つことによる〈判断力・技術力への影響〉や〈ペア学生への依存や比較〉などの【領域別実習への影響に対する懸念】も抱えていた。また、領域別実習でもペア受け持ちをすることもあることから【領域ペアへの期待】も持っていた。

#### IV. 考察

##### 1. ペア実習による領域別実習への影響

学生はペア実習を経験したことで、領域別実習でも学生同士で意見交換して他者から学び、協働することに抵抗がなかったと実感していた。基礎看護学実習Ⅱでペア実習を経験した学生は、ペアの補完により学習を深め合う経験を領域別実習のグループ活動においても活用していたと考えられた。また、学生から「ペア実習経験が領域別実習で役立った・良かったこと」として【他者との協働】が抽出されたのと同様に、指導者・教員双方から「ペア実習が領域別実習に与えた良い影響」として【協調性の向上】が抽出されており、基礎看護学実習Ⅱでペア実習を導入したことによって、看護職としても必要とされる社会人基礎力(3つの能力)<sup>8)</sup>のひとつである『チームで働く力』の向上に寄与した可能性が考えられた。

そのほか、学生の意見・要望の【ペア実習のメリット】からは、初めて患者を受け持ち、看護過程を展開する実習であるからこそ、ペアで助け合い、話し合えるペア実習による心理的安全性の確保ができていたことが伺えた。一方で、学生の領域別実習で困った・辛かったことから、単独で患者を担当することへの不安やその責任の重さを、学生が良くない影響と捉えていることが推測された。また、指導者・教員からも、領域別実習で初めて一人型実習を経験する学生に対し、単独での患

者受け持ちや看護過程展開への懸念が抽出されていた。

本学での臨地実習の現状は、初めて患者を受け持つ2年次の基礎看護学実習Ⅱではペア学生との協力の下で日常生活看護援助を提供し、3年次の領域別実習では単独で患者を受け持ち、治療を含めその人に必要な看護援助を提供する、という段階的な学習形態となっている。しかしながら、基礎看護学実習Ⅱの後、領域別実習開始までの期間(1年間)、学生は、机上学習が中心で看護技術演習がほとんどない状態となる。看護学生の領域別実習前後の不安については、未経験なものへの不安と緊張が反映して、実習前は極めて高い水準にあることが報告されている<sup>9)・10)</sup>。このように臨地実習そのものへの不安が高い学生が、臨地実習に出た際には、慣れない通学、臨地でのマナー、学習時間の確保等あらゆることに戸惑うこととなる。そのため、ペア実習の導入による影響だけでなく、実習間隔が1年あくことによる学生の知識や技術への不安や臨地実習そのものへの戸惑いが、指導者・教員にペア実習の影響として受け止められてしまい、懸念を感じさせた可能性も否定できない。

また、領域別実習に必要な学習への取り組みや患者との関わり方、バイタルサイン測定技術といった領域別実習を担当する教員が求める能力と領域別実習時の学生の能力には差異があることが抽出され、学生からも知識・技術の不安が抽出されていた。ペア実習では、学生個々が実施するバイタルサイン測定の回数が一人型実習よりも半減したことや、1人で実施可能なケアも2人で分担していたことが、領域別実習での実習行動に影響したと推測された。また、基礎看護学実習Ⅱでは、2年次の学生のレディネスに沿った到達レベルを踏まえてペア実習を導入したが、学生はペア実習を単なる分担として捉え、ペア学生の実施やペア学生とのやり取りを自分自身の学びに反映しきれていなかった可能性も考えられた。基礎看護学実習Ⅱで、学生の多くは、ペア学生の実施を見学することで自己の技術や手順を振り返ることができていた。しかし、ペア学生の実施を一步引いて見ているだけの学生もおり、次に自分が実施する際に、ペア学生が実施した様子や失敗を自己の糧にできず、戸惑うことや、同じ失敗をすることもあった。ペア実習においては、学生個々が実施するケアの回数が一人型実習に比べて制限されることは避けることができない。そのため、少ない経験を貴

重なる学びの場として捉えられるように、学生がペア学生の実施を自己の経験として受け止めて丁寧に振り返り、次のケアの改善に結び付けられるように指導することや、実習期間中に学生が短時間でも単独で患者に対応する時間を確保するなどの工夫が必要であると考えられた。

## 2. ペア実習に対する総合評価

基礎看護学実習Ⅱをペア実習で行うことに対して、学生の76.9%は「とても良い～良い」と回答していた。本研究では4年次学生を調査対象としており、卒業要件のすべての実習を終了した安堵感から過去の実習の記憶が肯定的になっている可能性も否定できないが、基礎看護学実習Ⅱをペア実習で行ったことに対して、学生は肯定的に評価しているといえた。

指導者は、70.0%が基礎看護学実習Ⅱをペア実習で行うことは、良くも悪くも「どちらでもない」、80.0%がペア実習による領域別実習への影響は「特になし」と回答した。指導者は、ペア実習の影響に関する是非を明確に判断できないものの、少なくとも良くないとは判断していないことが示唆された。教員は、71.4%が基礎看護学実習Ⅱをペア実習で行うことは「良い」、42.9%はペア実習による領域別実習への影響は「特になし」と回答しており、ペア実習後の領域別実習を指導した教員は、基礎看護学実習Ⅱで行ったペア実習方式を概ね肯定的に評価しているといえた。

指導者・教員の記述からは、ペア実習を導入したことに対して、懸念は見られたものの反対意見はなく、看護現場でPNSが導入されていることや、実習期間中に2週間継続して受け持つことができる患者の選定が困難な現状から、ペア実習を容認できるものと認識していることが推測された。以上より、基礎看護学実習Ⅱにペア実習を導入したことによって、領域別実習での学習に大きな問題を与えるような影響はほぼなかったと推測された。

## 3. 本研究の限界と課題

本研究において、学生・指導者の回収率は3割に満たず、回答者は学習や指導に前向きな対象者であった可能性がある。学生においては、領域別実習への影響ではなく基礎看護学実習Ⅱでのペア実習経験を回答している者も少なくなかったため、有効な回答を十分に得ることができなかった。さらに、対象学生は、2年

次に単独で患者を受け持った経験がなく、ペア実習と一人型実習を比較できないことから、ペア実習の是非を判断しにくかったことが考えられた。また、本調査がペア実習の導入期であったために、領域別実習のみであった現象が、前年度の基礎看護学実習Ⅱにペア実習を導入した影響によるものなのか判断するだけの材料がなく、指導者・教員にとっても回答しにくい設問であった可能性もある。加えて、全体的に記述量が少なく、その意味内容の抽象度を上げることが困難であったため、十分な考察ができたとはいえない。しかし、ペア実習後の実習への影響を調査した研究が見当たらない現状において、本調査にはペア実習の現状や評価を明らかにするという点で一定の価値があると考えられる。

今後は、学生が3年次に患者を1人で受け持つことに対して過度な緊張を持つことなく、基礎看護学実習Ⅱで得た学びを発展できるように、対人調整能力や自己教育力を高める教育的支援を行うとともに、基礎看護学実習Ⅱと領域別実習の担当教員が、それぞれの実習状況の情報を共有し、連携を図って実習指導を充実させていく必要がある。

## V. 結論

1. 基礎看護学実習Ⅱでのペア実習の経験が領域別実習に与えた良い影響として、学生から【他者との協働】、【他者からの学び】、指導者から【協調性の向上】、教員からは【協調性の向上】【円滑なペア受け持ち】が抽出された。
2. 基礎看護学実習Ⅱでのペア実習の経験が領域別実習に与えた良くない影響として、学生から【単独で患者を受け持つ不安感】、【単独で患者にケアを提供する戸惑い】、【患者への責任感】、指導者から【単独への看護過程展開への懸念】、教員から【領域で求める能力との差異】、【単独で受け持つ意識の低さ】が抽出された。
3. 総合評価として、学生・指導者・教員の7割以上からペア実習は概ね「良い～どちらでもない」、指導者・教員の4割以上からペア実習の影響は「特になし」との回答が得られたことより、基礎看護学実習Ⅱでのペア実習導入による領域別実習への影響は大きくなかったと推測された。

## 【謝 辞】

調査にご協力いただいた学生・臨地実習指導者・実習担当教員の皆さまに感謝いたします。なお、本研究は、平成30年度三重県立看護大学学長特別研究費の助成を受けて実施しました。

本稿は、第39回日本看護科学学会学術集会において発表した内容の一部を加筆・修正したものです。

## 【文 献】

- 1) 一般社団法人日本看護系大学評議会：看護系大学学士課程の臨地実習とその基準作成に関する調査研究報告書，平成30年3月。
- 2) 灘波浩子，岡本恵里，鈴木聡美，ほか：基礎看護学実習に導入した学生2人で患者1人を受け持つ実習方法の評価，三重県立看護大学紀要，26，1-13，2022。
- 3) 北田素子，笹川仁美，樺島稔，他：リフレクションの記録内容の比較分析からみた基礎看護学実習におけるペアでの受け持ち実習の学習効果，城西国際大学紀要（看護学部），29（8），1-16，2021。
- 4) 荒木こずえ，島田祥子，市田和子：母性看護実習における学生のチーム体制の評価，川崎市立看護

短期大学紀要，11（1），69-74，2006。

- 5) 平山綾蘭，市川英加，長田貴子，他：ペア実習の人間関係と実習満足度との関係，日本看護学会論文集：看護教育，42，46-48，2012。
- 6) 二宮恵美：小児看護学実習においてペア実習を行った学生の思いプラスの思いとマイナスの思いについて－，日本看護学会論文集：小児看護，44，174-177，2014。
- 7) 藤澤美穂，氏家真梨子，畠山秀樹，他：看護系学部の臨床実習における学生のストレス，岩手医科大学教養教育研究年報，53，39-50，2018。古屋千晶，西田みゆき，齊藤麻子，他：小児看護学実習における指導マニュアルを活用したペア実習指導の実際，医療看護研究，18（1），86-95，2021。
- 8) 経済産業省：社会人基礎力，2023.02.15 <https://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/>
- 9) 大村郁子，後藤理香，藤長すが子，ほか：A大学3年次看護学生が領域別実習前に抱える不安の実態，日本医療大学紀要，6，165-172，2020。
- 10) 飯出美枝子，三木園生，澁谷貞子：実習前後の看護学生の不安の変化について－STAIXを用いての分析－，桐生短期大学紀要，16，65-70，2005。